
「ヴィーン古典派」像の再構成——G. アドラーの音楽史叙述における歴史的想像力の分析

小川将也(九州大学)

ヴィーン古典派の概念は、現代においてもはやそれなくしては西洋の芸術音楽に関わる文化・学術活動は立ち行かなくなるように思われるほどわれわれに深く根付いている。この概念の歴史的、美的、社会的蓄積を無視することはあまりに無邪気であるが、しかし、この概念を取り巻く論点の飽和と固定化は、果たしてこれを改めて論じることなど可能なのだろうかという無力感をときに思い起こさせもする。本発表の最大の目的はアドラーのテキストを題材にこの無力感を減じ、〈古典〉を論じる可能性を提示することにある。

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンを〈古典的〉三巨匠として括る〈ヴィーン古典派〉概念は、E. T. A. ホフマンや R. G. キーゼヴェッターを経て、遅くとも 1836 年の A. ヴェントの著作では完成を見る一方で、音楽史叙述のための術語としての「ヴィーン古典派 (Wiener klassische Schule)」は G. アドラーおよび彼周辺のヴィーンの音楽学者たちに始まる。MGG 第 2 版の事典項目「古典派」にて L. フィンシャーは、前者がヘーゲルの歴史哲学に代表されるドイツ観念論を概念形成の地とする一方で、後者が多民族国家ハプスブルク帝国崩壊後の時代にあって〈ドイツ的〉であることを問い直すドイツ・オーストリアの自己理解の産物であることに言及している。

概念と術語との間の差異に着目するフィンシャーの指摘は実に示唆に富むが、しかし、前者がテキスト内在的な理論構造のレベルで特徴づけられるのに対して、後者はテキスト解釈のための社会的コンテキストのレベルで一種の反映論によって性格づけられる点には注意が必要だろう。本発表はこの性格化のギャップを埋めるべく、アドラーの論考「ヴィーン古典派」(『音楽史ハンドブック』初版 1924 年) を主たる分析対象に彼自身の音楽様式論ならびに音楽史叙述のなかでこの概念を問い直す。

アドラーの歴史叙述は、〈ヴィーン古典派の普遍性〉という規範的主張を音楽史的事実の次元で記述的に確保するための緊張をはらんだ諸種の調停実践に満ちている。発表では、星座表象、オブリガート伴奏、マンハイム楽派の周縁化、これら「ヴィーン古典派」を特徴づける諸要素——その多くは H. リーマンの音楽史叙述への批判的応答である——を概観したのち、作曲技法史に回収されない音楽の文化史へと接近し慎重な叙述態度を貫くアドラーのテキストに埋め込まれた〈古典＝終局〉の歴史哲学をあぶりだす。

ところで、以上の作業を通じてわれわれは、アドラーのテキストにおいて実現しているのは「ヴィーン古典派」概念の定義や説明ではなく歴史的想像力の働きによって生み出され、かつ、これを刺激する「ヴィーン古典派」なる像であることに気づかされる。概念から像への視点の転換はときに実体化を伴う古典派の等質的な概念史を再考するきっかけに通じるはずである。